

全日制 令和8年度 第1学期終業式 式辞

皆さん、おはようございます。

今日は小説『線は、僕を描く』からお話をしたいと思います。この本は過去に本屋大賞第3位となった青春・エンタメ系小説で、読んだことがある人もいるかもしれません。映画化もされましたが、小説の方が、圧倒的に描写が緻密で、スピード感に溢れた作品です。少しネタバレになりますがお話したいと思います。

さて、『線は、僕を描く』の主人公は大学1年生の青山霜介という若者です。彼は、深い悲しみと喪失感を抱えて心閉ざして大学生活を送っています。

そんな彼が、ある日、アルバイト先で偶然出会った水墨画の巨匠・篠田湖山先生に誘われ、水墨画の道を歩み始めます。

水墨画は、基本的に墨の濃淡だけで山水や花鳥風月を描きます。また、描き直しもできません。湖山先生は、「とにかくたくさん失敗を繰り返し、学ぶことを楽しめ」とか、「花に教えを請え」などと言うだけで、細かな技術は教えません。主人公は思うように描けない日々を過ごしながらも、彼は水墨画と実直に向き合い続けます。やがて自然が持つ瞬間の美しさと魅力を再発見し、それを水墨画に表現する楽しさに気づきます。巧いかどうかではなく、「生きている画題（題材）の瞬間の美しさ」と自身の様々な思いや意志を、一つひとつの「線」に重ねて、描いていくようになります。

最後に、師匠の名を冠した湖山賞公募展で審査員特別賞を受賞し、主人公がついに心の殻を破り、大切な歩目を踏み出して物語は終わります。

読み終えて、まず印象に残ったのは、主人公の「素直さ、実直さ」です。彼は師匠に言われたことを実直に実践し、もちろん盲目的ではなく、何度も考え、反省し、自発的に鍛錬を重ねていきます。これは水墨画に限らず、何かの道を究めようとする時に大切な姿勢ではないでしょうか。

もう一つは、一発勝負の水墨画ゆえに、自然が持つ一瞬一瞬の美しさを捉え、そして自分の思いを一筆一筆に重ねて表現していこうとする姿勢です。言い換えれば、目の前の一瞬一瞬を大切にし、「今を生きよう」とする意志や一生懸命さです。

部活動の試合を見に行くと、例えば最近見に行った野球部の夏の予選では、選手たちが一瞬一瞬のプレーに集中する姿、応援に来ている吹奏楽部のその一瞬一瞬のプレーを一生懸命応援する姿がありました。他の部活動も同じで、水墨画と向き合う主人公のように、そこには一瞬一瞬に一生懸命な人の美しさと呼べるものがありました。

皆さんはどうでしょうか。皆さんはこの1学期、目の前のことに素直に、実直に向き合うことができましたか。また、自分が出会った時間や物事と一生懸命向き合うことができましたか。

私たちの毎日は、水墨画に例えるなら、一筆一筆の線の積み重ね、つまり何かと向き合った時の姿勢（挑戦）の積み重ねです。上手く描けた線、苦しみながら描い

た線、それぞれ自分が思いを重ねて全力で描いた線です。遠回りや失敗も、全力であれば無駄ではなく、自分という長い線を作る大切な一部です。

普段の勉強も、受験も、学校行事も、部活動も、そして課外活動も、その時にしか出会えない瞬間を大切に、実直に向き合い、それぞれ自分だけの線を描き続けてください。その思いや意志を重ねた線は、お互いに影響し合い、結びあって、仲間同士による一つの協作（共同作品）を作り上げていけるのではないかと思います。

さあ、明日からの夏休み、そして2学期、皆さんは何と、どう向き合いますか。

最後に、忘れないでほしいのは、世の中では、世界的イベントであるサッカーワールドカップなど明るい話題で盛り上がっている裏側で、悲しい出来事や深刻な問題が存在するということです。自分のことばかりでなく、隣人にも目を向けられる感性は失わないでください。

それでは、2学期に元気な姿の皆さんに会えることを楽しみにしています。

校長 田中 重春